

巻頭言・「親ガチャ」と私の歯

西川 伸一

「親ガチャ」という言葉がある。二〇二二年一月三〇日付『朝日新聞』「天声人語」はこう書き起こされている。「子どもは親を選べない。人生の当たり外れは親次第。生まれた瞬間、勝負あり。そんな意味が込められた「親ガチャ」。今年何度も目にした言葉だ」。

物事がうまく運ばないとき、私はたびたび親のせいにしてきた。もちろん原因は自分にあるのだが、「親ガチャ」を恨んでなんとか心の整理を付けたのだった。「親が悪いからだ」と八つ当たりされた親はたまったものではなかったろう。おわびをしたい。しかし、父はとうに他界し、母は「要介護度5」となつてちよつとでもこみいった話は理解できない。

それでもひそかに「親ガチャ」にずっと感謝してきたことが一つだけある。一九七七年、高校一年のときの歯科検診で歯科医から「ぼく、いい歯してるな」と褒められた。高校生に「ぼく」かよと思つたものの、この言葉は高校三年間で、いや一〇代のうちでいちばんうれしかった言葉だ。

話はさらにさかのぼる。保育園の年長組のとき私は歯で表彰されている。新潟の実家にいた母の認知症が進んだため、相模原市の高齢者施設に母を入所させた。そこで実家を処分せざるを得なくなり、昨年三月に帰省して片付け作業をした。その最中に次の表彰状をみ



つけた。

高田市とはいまの上越市で、昭和四二年は一九六七年である。ぼける前の母は「あのときはうれしかった」とよく言っていた。とはいえ母は私の歯磨きを熱心に指導していたわけではない。すべては「親ガチャ」なのだ。父の歯がよく、それが私に遺伝したにすぎない。

一九九〇年に二八歳で明大に就職したとき、母から生命保険に入れと勧められた。入るにあたって歯科検診も受ける必要があった。近所の歯科医院にいつて口をあけると、歯科医が「まったくはじめてなんですか」と驚いたように言った。永久歯に生えかわって以降、私はそれまで一度も歯医者にかかったことがなく、もちろん歯の詰め物など一つもなかった。「どうだ、まいったか」と私は心の中で快哉を叫んだ。

ただ私はそのために何の努力もしていない。それどころか、白状すると面倒くさがって寝る前に歯磨きはせずうがいだけで済ませていたほどだ（今はきちんと夜の歯磨きもしています）。それから六年して弟が結婚することになった。なぜか私は歯をきれいにして結婚式に出ようと思いついて、歯科医院で「歯の汚れを取りたい」と告げた。すると歯科医いわく「こんなに歯石がついては一度ではとても取りきれない」。私が歯と思っていたのが歯石だと知らされてびっくりした。歯と歯の間は歯石でびっしりだった。結局弟の結婚式には間に合わず、日記で確認したら当時の私の歯医者通いは二一回にもなっていた。

この一件以来、毎年三月と決めてその歯科医院に歯のチェックと歯石除去をお願いしている。来院するたびに先生から「西川さんが来ると、もう一年経ったのかと思う」と言われる。

屈辱なのはその後これまでに虫歯が二つみつかつて、今では詰め物が二つあることだ。

「8020(ハチマルニイマル)運動」というのがある。厚生省と日本歯科医師会が旗振りしている「80歳になっても20本以上自分の歯を保とう」という運動のことだ。20本以上の歯があれば食生活に不自由しないのだそうだ。「そんな余裕だぜ。80歳になってまた歯で表彰されてみせる」と傲慢にも思っている。

生まれるとき親は選べないし、性別も選べない。エスニシティもまたしかりだ。すべては「ガチャ」である。なのに本人の努力ではどうしようもない不合理が「通念」のように平然とまかりとおっている。たまたま男性に生まれたただけなのに女性を見下したり(あるいはその逆)、たまたまあるエスニック・グループに生まれたただけなのに他のエスニック・グループを差別したり。ヘイトスピーチはそのきわみだ。私の歯でかみ切ってやりたい。おっと、それでは歯がボロボロになって表彰されなくなってしまうか！

二〇二三年二月四日 立春そして北京五輪開幕の日に